

“映像教育”に関する国際協力開発の試み（各国の要請に応じて）

~~~~~ 世界と手をつなぐ豊かな心の育成 <そのⅢ> ~~~~~  
久野登久子（高千穂学園・高千穂幼稚園）

## 研究の目的

近年、教育に果たす映像の役割が重視され、世界各国で教育放送への取り込みが活発化している。しかしどのような形でこれを開始、進展させていけばよいのかとまどっている国も多く、50年の実績をもつ日本に、ノウハウの指導を期待する声が高まっている。（特に文盲率の高い発展途上国において。）

こうした新しい分野の国際協力を発展しつつ、世界と手をつなぐ豊かな心とたくましい力を育くんでいく。設定の理由……幼稚園・保育所で、放送は毎日、一人一人の幼児が心身共にたくましく豊かに成長していくことを願って保育を行っているが、遊びや生活を体験や活動に発展させ、人間としての生き方を学ばせ、放送は、文字学習外の教育手段として最も有効な一手段であることは、多くの研究発表で立証されている。

国の内外を問わず、科学技術の進歩、経済の成長、情勢の拡大等に伴ってさまざまな分野での国際交流が展開されているが、ゆえに現代社会の中で、“アジアの日本”としての存在や日本人のあり方に、多くの問題と期待がかけられていることも事実である。こうした中で、放送教育の先進としてこの指導援助を日本に望まれているならば、真剣にこれを受け止め、日本が普通人で至るノウハウ（ノウハウ）を地球村の交差に伝えしていく必要感があると考えた。

## 研究の方法

### 1. 日本の放送教育の現状を把握する

NHKが教育放送を、ラジオで開始して50年、テレビジョンで開始して30年を経過した。このア史の中で放送は我が国の学校教育に大きな役割を果たして来た。第2次世界大戦の後、大きな教育改革が行われ、新しく出現した社会科や道徳などの指導について、教師に充分な経験や知識もなく、教材も未整備であったが、放送を送り出す映像やドラマ形式の教育番組がそれらの効果を発揮し、実験・観察の映像も、設備教材の不足を補って成果をあげ得ることが立証された。

一口に50年と云って各校行は日進月歩であり、教育内容は急速に発展していく中で、失敗も成功もあり、競えす新しい問題へと挑戦し、成長してきているのである。

1985年調査による学校TV受像機普及率は、何れも100%に近く、利用率は非常に高い。学校放送は、家庭で視聴する一般娯楽などとは異なり、教師が主体的に存在し指導することと前提としており、基本的立場は、

“教室の先生の授業を豊かにする補助が放送の役目であり、その番組を創出しより良い授業を展開していくのが先生の役割”である。この利用の経緯もいろいろある全国組織（幼・小・中・高・特殊）があり、現場の先生と番組制作者が、関係官庁と共に、制作及び利用の検討、共同作業を行ってきた。

このように放送教育は次第に確立して来ましたが、最近の多岐なニューメディアの進出は、カセットVTRの普及による録画利用の進行、ディスクによる情報の大収容能力とランダムアクセス機能、マイコンによる個別化教育、CATVの双方向性など、従来の“放送”の有効性にさまざまな影響を与えはじめている。

幼稚園・保育所においても、僅か1日5分の学校放送にはあるが、子ども達の大好きな、かつ全園みかわっていく文化財としての放送が、知的意欲を高め情緒を深め、感覚・思考・知覚、認知全般にわたって一生に大きな影響をもたらしつつあるだけに、そのあり方や指導の研究が（特に学校放送以外の時間について）親も教師も受けられない今日の課題として存在している。

### 2. 諸外国の放送教育の現状を把握する

教育の場において、どのようなやり方で、どのように利用しているかは、国によってかなりの違いがあるが、概して云えることは、このメディアの特性である広義性、連綿性、臨場感などが尊重され、教育の近代化の最短ルートとして重視されていることが多い。このことは、かつて（1974年）文部省、NHKの依頼で参加し、発表の機会を与えられた『教育メディアに関する国際会議（ユネスコ）』の中でも充分察知できた。その後数々の国際会議や、諸外国からの見学者と交流する機会に恵まれ、これらの実態を把握し以上で、益々しい教育放送のあり方研究の拡大が必要であることが理解し得た。

### 3. 教育放送に関する国際交流の実践

ここでは特に6年度の研究交流の実践のフットを記す。

#### (1). 中国の場合

『日中教育放送シンポジウム』にて発表・協力。

時：— 1988年5月3日～12日

所：— 中国・北京市

参加者：— 日本側は、天城勉先生（文部省顧問）を団長とする大学教授、現場教師、番組制作者等、16名。中国側は、中国中央電視台（テレビ局）スタッフ

アをはじめ、全国各省市の放送局代表、教育委員会、大学関係、マスコミ関係等、各方面より予想を大きく上回る172名の参加で、会場は熱気に溢れた。

内容：—国産の日本の20数倍、人口は10倍を越す中国で、テレビ局は1958年に創設された。10年前までは30局であった番組制作局も現在204局となり、テレビ大学はもとより、テレビ小学、中学も一部に存在するという。しかしこの28年は苦難の道であり、内容はまだ子供の現状であるという。豊かな理論と技術をもつ日本に学ぶ所大であり、このシンポジウムを通し、中国のテレビ教育を推進し、両国の放送教育の友誼を深める毎のこうした会談も是非続けたいと切望した。



西国の番組交換（日本の幼稚園の発表）が非常に貴重であった。（北京・民族文化宮にて）

## (2) ネパール王国の場合。

『幼稚園での公開保育』実施、協力。

時：—1986年8月3日～7日

所：—ネパール・カトマンズ市。

参加者：—日本側、ネ幼協会員のボランティア6名、大使館員、日本人会員の協力員。ネパール側は幼稚園教師30名、園児200名、大使館員、文部省役人等。

内容：—ネパールとは、1978年より、親日家であるこの園の知識人らからの強い要請によって、幼児教育に関する諸々の援助を続けて来た。（私立幼稚園協会→日本・ネパール幼児教育協会）

従来は、体力づくりや情操教育は金とあってボランティア活動を行って来たが、1984年夏の折には、現地の幼稚園より視察教育の指導を……との要請があり、日本人会館に持ち寄り行ってビデオを利用した公開保育に賛意を仰ぎ変えて実施した。折しも同



園では、一昨秋より全園のテレビ局が南局建設したが、雄大なヒマラヤ山脈を背にした環境等から、種々の問題が出て、目下日本国の指導のもとに、研究改善の努力が続けられている。

両国事前打ち合わせの結果、敬と音楽をとの希望を入れ、「ほのぼのしりぞく」の視聴から、3、4拍子ワリズ4拍子と、教あそびも展開した。日本の幼稚園の足型プリント製作を持って来ていたので、リズムと足跡をうまく利用し楽しい保育が展開したので、子ども達は勿論のこと、先生もとび出して大に動き出す様、楽しく有効な時間でもあった。

当日実施したアンケート調査により、この国のテレビ普及度は予想以上に大きく、テレビ、ビデオによる教育に對する期待が非常に大であることが理解できた。帰国後放送教育に関する協力、援助の要請が文部大臣を通じて提出され、目下今後の交流活動を検討中である。

## (3) インドネシアの場合

『アジア教育放送シンポジウム4日』にて発表、協力。時：—1986年11月30日～12月5日。

所：—インドネシア・ジャカルタ市、バリ島。

参加者：—日本側は、東洋先生（東京大学）を団長とする大学教授、現場教師、番組制作等17名。海外からは、インドネシアをはじめとし、アビダ、太平洋地域の教育放送関係者、韓国、タイ、フィリピン、マレーシア、シネガポ、インド、スリランカ、オーストラリア、ネパール等々、延600名。

内容：—三日間のシンポジウムでは、日本ノウハウを紹介し、各国の現状や問題点も出た。今後の展望につ

いての情報や意見の交換、アジア各国の教育放送関係に対する協力関係を深める。



## 結果・考察

・世界各国の教育（バリ島、幼稚園や放送局見学）現状と教育放送に対する姿勢がよく理解できた。

・エニエーションの地球化が人間の生活や暮らしにも大きな変革をもたらす。文化的新しい段階を迎えた今、放送教育の国際化という面で研究開発も、ますます必要とされるであろうと考えられる。

・特に発展途上の国々から日本に大きな期待が寄せられていいる現状、教育放送のノウハウやシステムをどうした面で見直ししていく必要がある。

・我が国に於ては、生涯学習体系への移行と共に、高度情報化や国際化への対応等、教育改革の流れを認識し、かつ、時間的にも空間的にも広い視野に立ち、山積している種々の問題に処する教育者の資質向上や根本的な近未来教育について哲学的に考えをいかにねばならない。